論文の内容の要旨

論文題目　　明治知識人としての内村鑑三 ―その批判精神と普遍主義の展開

氏名　　柴田　真希都

本稿は、近代の知的状況をめぐる代表的な二つの知識人論、Ｅ・Ｗ・サイード *Representations of the Intellectual*（邦題『知識人とは何か』）（1994）とＪ・バンダ *La trahison des clercs*（邦題『知識人の裏切り』）（1927）の問題意識を援用しつつ、明治期内村鑑三の普遍主義に立脚する知識人としての特質を解明しようと試みた論文である。

本稿は序論を除いた箇所を本編とし、五つの章と結論部において形成され、それぞれの中にいくつかの節・項を用意している。その構成に関して大きく参考としているのが、先に提示したサイードの知識人論において展開される論点の数々である。とはいっても、それはサイードが該テキストで行った章立てに沿うものではないし、また、彼が論じた順序に対応するものでもない。サイードが該テキストの随所で提起した、知識人を論じるにあたり興味深く思われる諸性質を、筆者が内村という知識人像を彫像していくのに適当だと思われる配置や比重において再構成して、本稿全体の構成や論旨に適用している。またサイードの知識人論ではそれほど強く言われていなかった論点でも、内村の知識人としての特色を強く表すものと思われた場合には、分量を割いて検討したところもある。

まず序論では「研究の視座―新たな方法的視点からの内村研究に向けて」と題して、本稿起草にあたっての著者の問題意識とそれに呼応する内村研究の現状について述べた。著者の問題意識とは、内村を明治期日本の、さらには近代日本における特色ある一知識人と

して記述し立像することに他ならない。先行研究との関わりでいえば、本研究の意義は、西洋知識人論における知識人の規範や責務という観点から、内村鑑三の豊穣なテキスト群に新しく光を当て、その言動や思索の総体に関する新しい読みと語りの可能性を模索する、といったことになると理解している。

そうした問いの導入に加え、序章においては、内村鑑三に特徴的な思惟や行動の様式、教養体系などに関する見通しを 4 点に簡潔にまとめ、以下に述べる本論での分析に資する、一組の対概念からなる基礎的な範疇とすることを提案している。その 4 点とは、①科学性と実存性、②書斎と実地、③humanity（人間味）と divinity（神聖さ）、④一九世紀的教養と西洋古典研究、である。とくに③に関しては、内村の思惟構造の根本に位置する、価値判断をめぐる二つの基準として、本編における各テキストの読み解きや考察の展開に際して積極的に応用したところである。

第一章は「現状に対する異議申し立て」と題して、主として内村の論述が帯びた権威・権力への批判的構えについて検討した。そこでは従来、あまり分析的に整理され、提出されてこなかった内村の旺盛な批判精神の内実をテキストに沿って組織的に解明することが目指された。内村の批判精神は、それこそ彼を一時代の論客にまで押し立てた重要な成分であり、多くの青年知識層やその予備軍の支持を取り付けるのに有効に機能した素養であった。また、彼の批判精神がいかなる表現をとって世俗権力と対峙したのか、その具体的な様相を、言論統制下であることに留意して「検閲」への意識という側面から分析することを行っている。検閲への意識が、ある意味で、味わい深い表現を創造することになったことも考察される。本章では、批評の表現面だけでなく、その表現が形成されてくる彼の思惟構造にまで踏み込んで考察していく。その際、内村の思索の根幹に自由探究と逆説の精神を認め、その精神が必然、読者に対して、世の価値観に立ち向かう動機と原動力を与えようとしたさまを確認していくことになる。

第二章では「独立・自由・個」と題して、内村という人間が、あくまで単独の個人の知的・精神的自由にこだわった姿勢に着眼する。まずは、その行動と言論の方向性が、彼一人の独立への気概からくる「自由」な判断から導かれている、という点を十分に掘り下げることが目指された。その際、内村が意識的に強くそこへの定着を望んだ、真理と正義を中核とする普遍的諸価値の系列が抽出されることになっただろう。彼があくまで単独の個人の立場から、対象としても魅力的な個人を語ることを好んだことも検討される。続いてそうした個人への着眼に伴い生まれるところの、社会への違和感について、「反社会」という視点から考察を行った。内村が社会をどこかで厭いつつも、興隆しつつあった社会主義の問題を取り上げたり、自ら独自の社会共同体ビジョンをもって、その形成に尽力した

りしたさまも顧みられる。とくに日露戦争以後、内村が人間と国家への失望を強める中で、雑誌や直接の交流を通じて、その読者、支持者との半俗半聖とでもいうべき知的交流を重ねていった様子が分析された。

第三章は「亡命者・周縁者・アウトサイダー」と題し、内村が明治後半期の日本社会においていかに微妙かつ独自の道を歩き、発言してきたのかを、サイードの提出した知識人の特質をめぐる議論を援用して整理している。まずは、内村の exile（亡命者・流竄者）としての足跡と、その経験に関わる故郷意識が問題とされる。その際「第二の故国」、精神の故郷としてのアメリカへの視線が重要となるだろう。日本社会における精神的亡命者を生きる内村にとって、最も便利で居心地の良い場所は、いわゆる都市と文化の中心部ではなく、その周縁部であったことも注目される。内村が周縁に位置する立場を重んじながら、さまざまな領域や要素を媒介する境界人として働く意志を強く打ち出したことも示唆的である。政治社会や宗教領域におけるドグマとの意識的な対決者であった内村が、同じく正統や主流の取り扱いをうけない人々を取り上げ、彼ら「異端」の意義を積極的に評価していったことも、この文脈において重要な意味をもったと考える。

第四章は「世界市民の立場からの告発」と題して、内村の明治知識人としての思想史的意義の核心に迫っていく。すなわち、内村が国家や民族の枠組みを超えて、世界や人類あるいは宇宙の一個人かつ一成員という立場から、偏狭で自讃的、他者排斥的なナショナリズムを批判していく、その論点と技法の整理が行われる。続いて、彼が権威・権力への批判を重ねる中から培われた国家形成や社会改革のビジョンが、いかなる勢力によるいかなる道筋を想定していたのか、とくにその非政治的な姿勢が解明される。具体的には、田中正造と懇意な関係を維持した足尾銅山鉱毒事件への関わりを取り上げ、そこでの言動に見られた内村の公平・公正さを求める感度の鋭さ、告発の厳しさと自己流の貫徹のさまに光があてられる。さらには、内村の普遍意識を伴った言説体系の中心に位置する『聖書』テキストに留意し、聖書研究が普遍的諸価値の実現を追い求める知識人の、独立した社会事業という自覚的な営みであったことを明らかにする。

第五章では、「反政治的志向の知識人」と題して、主たる理論的参照枠をサイードの知識人論からバンダのそれへと切換えて考察が進められる。サイードがそこまで踏み込まなかったところの、知識人の政治化現象そのものへの批判に内村が連なっているからである。そこでまず主題とされるのが、世俗のことを世俗の立場からでなく、超越の立場から、しかし世俗的な道具立てや意義づけを用いて批判することを流儀とした明治知識人・内村の現実主義批判である。それは近代知識人の政治的・国家的情熱の亢進の元に、彼らの世俗化と現実主義化を認めて批判したバンダの議論と呼応するものである。その文脈をうけて、

内村の政治理想を主題化し、彼が政治という営みそのものを蔑ろにせず、むしろそれへの高い理想をもって、現実政治の逸脱を批判する立場をとったことを解明する。また、従来、詳細かつ明瞭には言及されてこなかった、内村の共和主義者としての側面に大いに光を当てるのもこの章の目的となる。共和主義のエートスと順接するところの、反・天皇制国体の思想にも言及することで、明治日本の知識人でありながら、世界市民として生きようとした内村の、その特異な思想的境位がより明確な輪郭をもって浮かび上がることが意図される。この流れにおいて、内村による独自の思想史的到達ともいえる「非戦論」をめぐる議論を配置することによって、それを生み出した明治日本の、そして帝国主義下の異端的知識人の逸脱性がより際立つことになったかと考えられる。

「考察と結論」と題された最終章では、独立・自由・個人性の擁護者としての内村の言動の諸相を、「普遍主義」に立脚した知識人の役割という観点から総括する。それに加え、単に西洋に伝統的とされるそうした知識人像に共鳴するだけでなく、明治の、近代日本の社会において特殊な仕事を請け負った「特定領野の知識人」として、彼の専門領域がその知識人活動にもたらしたところの特色についても考察した。その際、〈パウロの普遍主義〉（アラン・バデュウ）と〈預言者的個人主義〉（ロバート・N・ベラー）なる二つの概念が、内村の言動やそのテキストの言葉を再解釈する重要な分析装置となっている。内村が、自らの担当する特殊領域（＝聖書研究の場）に由来する言葉を世俗の諸場面に適用することを通じて、いかなる人間像や倫理的指針、職責理解を我がものとして発信していったのか。そこに見出される彼の、国民の専門家としての経験や意志を踏まえながら、他者に寛容でありつつも普遍法則的な世界を志向する一知識人の、批判的諸活動の意義を理解する新しい言葉を探求すること、それが本稿の最終的な目標となっている。